

おたがわおじ

編集・古平町史編纂委員会
発行・古平町史編纂室
第二十七号（一日発行）
平成三年十二月一日

明治初期・古平場所の 様子と行政のはじまり

近 藤 芳 一

古平場所の場合であるが、寛文九年（一六六九）

「蝦夷乱情況図」に古平・新井田清兵衛、同清三郎と記録されている。この年、「津軽一統志」によれば、シャクシャインの蜂起の年に古平では、十八人の和人が殺害されている。この「新井田一族」は、古平場所の知行主である。

●宝暦元年（一七五一）

岡田弥三右衛門が、港町に恵比須神社創建とある。この岡田弥三右衛門は、当時、古平場所の請負人である。

場所での交易の相手は当然蝦夷人（アイヌ）である。また、

運上家は土地のアイヌを雇い直接漁場を経営していた。

当時は交易といっても物々交換である。運上家は収益を上げるために、一方的に交換比率を上げたり、蝦夷人に強制的に労働を科したり、徹底的にアイヌ人を搾取した長い歴史的な経過

健康優良児第一位

世界柔道でも優勝

昭和38年

余市保健所・みなと婦人会等の協力で乳幼児検診（一〇／二一）が行われた。一五四人中九七人が検診を受け、その中から健康

がある。そのために北海道のアイヌ人口は激減した。

前記の請負証文にある「蝦夷に非分申不問敷大切に商売等可致候事」また別の証文では「蝦夷人介抱方の儀急度大切に相守可申候」と、決まり文句が記されている。実はこの文言はあくまでも建前であって、各場所では全く逆の実態であった。場所請負人の利潤追及がもたらした必然的な結果であると見る事ができる。

蝦夷人（アイヌ）の搾取については、古平場所もその例外ではなかったことは、古平町史でも明らかである。

明治初年三月、「旧運上家役職者」の記録として、次のよう

優良な赤ちゃんを選んで表彰し記念品を贈った（一／二〇）。

柔道世界に輝いた須貝等選手は、さすがに優良乳幼児としても第一位であった。

この年、入賞（五位）した赤ちゃんを紹介すると、
第一位 本町 須貝 等

に記されている。

運上家

支配人 広谷 理助

通 辞 由五郎（蝦夷と和人の間をとりもつ役）

帳 役 多八郎（書記役）

爪 役 土人

惣乙名 ニトハシ

惣小使 サケクワシ

小 使 ヤイヘツカル、ナ

ヨロホキネ、マイナの三名

このような組織は、場所請負

が開始された時からあったものでなく、相当時代が過ぎてから

組織されたものであろう。

（つづく）

第二位 稲倉石 田村律子

第三位 浜二 斎藤 英樹

第四位 沢江 池内 慈子

第五位 新地 長谷川朝也

皆さんお元気で、もうお父さん・お母さんでしょう。

悲しい思い出

急性肺炎の謎？

昭和の始めごろ、稲倉石鉱山からのマンガン鉱はかます詰めにして、元山より何十頭という馬そりで、港町の貯蔵場所へ運搬していた時代があった。ほとんど地元の農家の顔見知りのオジサンたちだった。寒くなると馬は白い息を吐き、からだから



は湯気が立ちのぼっていた。きつと、一かます何銭かの安い運搬賃だったのでしようが、鈴の音を響かせながら道中お互いに助け合いながら働いていたように思う。そのうちトラックで運搬するようになったが、まもなく、元山と堤の沢間の索道が完成した。これがさらに港町まで延長された。

鉱業所では、鉱石の品位を上

げるため、一部のマンガンは元山で薪を使って焼いていた（ばい焼）。耐火レンガ構造のばい焼がまで作業する人は、本州からの出稼ぎの人であったが、主として、青森・秋田・山形など東北の人が多かった。このばい焼の煙が今でいう公害の元凶であったのか、春先になると四、五人は必ず肺をやられて死んでいった。この仕事は、今言われているいわゆる「3K」だが、

賃金が外に比べて良かったせい、その職場には人が集まっていた。やられるのは、体力のない年寄りが多かった。病名はいつも「急性肺炎」と診断されていたようである。

元山のばい焼していた付近の森林一帯は、当時からほとんど木は枯れていて、緑の枝は見られなかった。

誰言うことなく、ばい焼の仕事

をしている連中をみて、「来年は、誰の死ぬ番だべ……」なんて噂してのを聞いたことがあつた。不幸にもそれが当たる確率が高いのである。ほんとうに悲しい思い出である。

また、長く坑内作業をしている人にも、あの当時から「よろけ」と呼ばれていた公害病（鉱塵を吸うので肺をやられる）がすでに発生していた。公害という言葉すらなかったところに、痛ましい犠牲者がいたのだ。なんとも暗い悲しい出来事である。あとで、私の同級生であった大久保広蔵君も、坑内事故で他界されたと聞いている。彼は近所で友だちだったし、体格のよい優秀な男だった。惜しい友を失って残念でならない。

今回、どうしてこんな悲しいことを書いたのかわからない。遠い昔の幼なじみの君が語りかけて来たのかなあ？
人生楽しい思い出ばかりではない。こんな暗い歴史のあったことも忘れられない。

坑内の作業員は、よく黒砂糖

やこんにやくを食べた。「黒砂糖には毒消し、こんにやくには鉱塵の排泄作用がある」とか、或る鉱夫のおかさんが話していたつけ……。

つづく

治和 繁盛した吉平の

「どぶろく」造り

アイヌの人たちはアワ・ヒエ等で酒を造っていたが、和人と交易をするうちに、米で造った濁酒や清酒の味を知るようになった。また、漁業者が多く住むようになると酒の需要も増えた。

そこで酒を製造する業者が急に増えて、明治十三年には十七軒にもなり販売もしていた。製造石数は、濁酒三十九石・清酒十七石、計五十六石（一升びんで三千百本余り）であった。

昭和の始めころでも、港町の裏山に住んでいた老夫婦が、ヤン衆や漁夫を相手に、こっそりどぶろくを造り売っていたことがある。（細野六次郎さん談）

随筆

今だから言えること

「クビの由来」 二

吉川 羊我 雄

祭典の時、浜町の故三川唯君の店内で、同好の者たちが絵の展示会をやったことがあった。農協職員の斎藤嘉勝君が漫画を出展したが、その題材にしたのが、当時、農協がこぞって反撥していた「家畜税付加税」に係わる、今でいう政治風刺漫画であった。その展示会に私の「花の絵」があったことが問題視され、例のボス諸公が、強引に伊藤助役に迫ったようだ。

「吉川君よ、こりゃ目クソ鼻クソだなあ——」と、町長室に呼ばれた時溜め息をついていた。

今なら、こんな馬鹿げたことが議場で云々されることなど無いが、時は終戦直後のデモクラ

シー未だしのころだ。

ある日、出張から帰って来たら町長室に呼ばれ、伊藤助役から誠意ある「クビ」を申し渡された。

「君の言いたいことは山程あることは十分承知しているが、

出稼ぎ 樺太のジャコシカ

若松 定備 (談)

わしは、大正十二年から昭和六年まで樺太へ出稼ぎに行っていたが、とにかく樺太は景気が良かったな。だから古平の鯨場が切り揚がると、古平から二百人以上も出稼ぎに行ったもんだ。以上も出稼ぎに行ったら、早く鯨が不漁だったりすれば、早く

黙って辞表を書いてくれ。退職は三ヶ月後に発令するし、その間イヤだったら役場に来ても来なくても良いから——」というものだった。

そのころ、大沢町長は再起不能の病気であったし、前述したように私は伊藤助役が好きだった。私がゴネたら、軌道に乗り始めた町政に蟻の一穴になりかねないと判断したのは、我ながら賢明であった。

「真相を話せ」と、血相を変えた同志会の今良六幹事長を始め、農民を代表してと、断つて関口八郎会長。人民をなんと思

から行ったし、樺太行ききの汽船が古平の沖から出たこともあった。本州から出稼ぎに来てた人の中にはも家に帰らないで、そのまんま働きに出る人もいた。わしは、仲間からジャコシカって言われてたよ。ジャコシカ

っているのかと共產党の皆さんが、連日我が家に押しかけて来た。

それから時が過ぎ——伊藤町長の入院先を見舞った時、

「吉川君、濟まなかった」と一言詫びられ、その数日後に亡くなられた。

はとつても用心深くて、人の足跡がある所には絶対近づかない。それで、給金のいいところばかり狙って歩いて、安いところには近づかない者のことをジャコシカって呼ぶんだ。

わしが行ってたころは、軍関係の仕事が金になった。樺太はソ連との国境線があるので、軍用道路の建設で忙しかった。なんでも話によれば、木の根っ子一つ掘ればなんぼ——という値段がついてたそうだ。

そのころ樺太は開発途上だったので、とにかく人手はなんぼあっても足りなかった。

—— つづく ——

(これは、若松定備さんのお話をもとにしたものです)

※※※※※※※※

アイスクリーム売り

※ 出

※ 朔

※ の隣りの屋台では、砕いた氷の入ったトタン

※ 思

※ 銀

※ 張りの箱に

※ り

※ 祭

※ 赤や黄や

※ お

※ 間

※ 緑色の砂糖

※ い

※ 水

※ の水の中に

※ し

※ 本

※ た試験管が

※ か

※ つ

※ 何十本も立

※ な

※ 井

※ ときどきそ

※ 井

※ の

※ の氷の中に

※ 塩

※ を

※ 入れている。

※ 凍

※ 固

※ ま

※ 凍

※ 固

※ ま

※ 凍

※ 固

※ ま

※ 凍

※ 固

※ ま

※ 凍

※ 固

※ ま

※ 凍

※ 固

※ ま

※ 凍

※ 固

※ ま

※ 凍

※ 固

※ ま

※ 凍

※ 固

※ ま

※ 凍

※ 固

※ ま

※ 凍

※ 固

※ ま

※ 凍

※ 固

※ ま

※ 凍

※ 固

※ ま

※ 凍

※ 固

※ ま

※ 凍

※ 固

※ ま

※ 凍

※ 固

※ ま

今この玉の湯の前に、クジ引き

の屋台が出ていた。色々なおもちゃが並んでいた。大当たりは懐中電灯（懐中電氣と言った）で、四角い形をしていて、横のボタンを押すと点灯し、当時は大変珍しかった。店で買うと五十銭ぐらいもした。次は百連発のピストルで、巻いてある紙玉を入れるとパンパンと早打ちができる。これは現在でも売っているが、五十銭ぐらいしたように思う。

くじは紙を捻っただけのもの

で、菓子箱のような箱の中に入っている。一回五銭で、当たれば五十銭相当の景品が貰えるので、子どもたちは盛んにこのくじを引くが、さっぱり当たらない。はずれの時は、ニッキのついた棒菓子を一本くれる。大人が引いても当たらない。それでも手持ちの小遣いの具合を計算しながら、七回引いて三十五銭、それで五十銭の景品が貰えればいくらか得をする——、

やっぱり当たらない。ついに九回引いてもだめ、諦めて帰ろうとする

とすると、屋台のおじさんが、

「当たらないなあ」と言いながら、「何回引いた？」と聞くから、「九回だ」と言うと、「当たったことにしてやるさ」と、子どもたちのたくさん見ているところで、百連発のピストルをくれる。店で売っているよりも五銭安く手に入ったことに

なり、喜んで家に帰った。

子ども心にも、あの箱の中の捻ったくじは、みんな空くじだったのではないかと思った。

次の年のお祭りにも、またあの屋台が出ていたが、損をするので、もうそこには立ち止まることはなかった。

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

昭和十二年から続いていた支那事変の戦火がさらに拡がり、十二月八日、日本はついに米・英との全面戦争に突入した。

この日の朝早く、ラジオは興奮した声で開戦を告げた。この日は、臨時ニュースを加え実に十八回も放送された。

小学校では朝礼のあと、高等科の男子生徒は琴平神社、ほかは恵比須神社へと、それぞれ戦勝祈願の参詣をした。

町では翌九日一時半、小学校に、役職者や一般町民が集まり町民大会が開かれた。町長が宣戦布告の勅語を奉読し、町長、警察署長、校長の挨拶があり、万歳三唱をして三時閉会した。

「（略）町内どこへ行っても戦争の話でもちきりであった」（高野名幸作さん日記より）

政府は十二日、この戦争の呼び名を、支那事変を含め『大東亜戦争』とした。

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

「△△日は△△さんの日」

太平洋戦争はじまる 学校や町では戦勝祈願

—開戦から△△年で五十周年—

〔昭和16年〕